

1) 応募部門

散歩・散策部門 / ~~ジョギング部門~~ (どちらかの部門に○印を付す)

2) タイトル (コース名称)

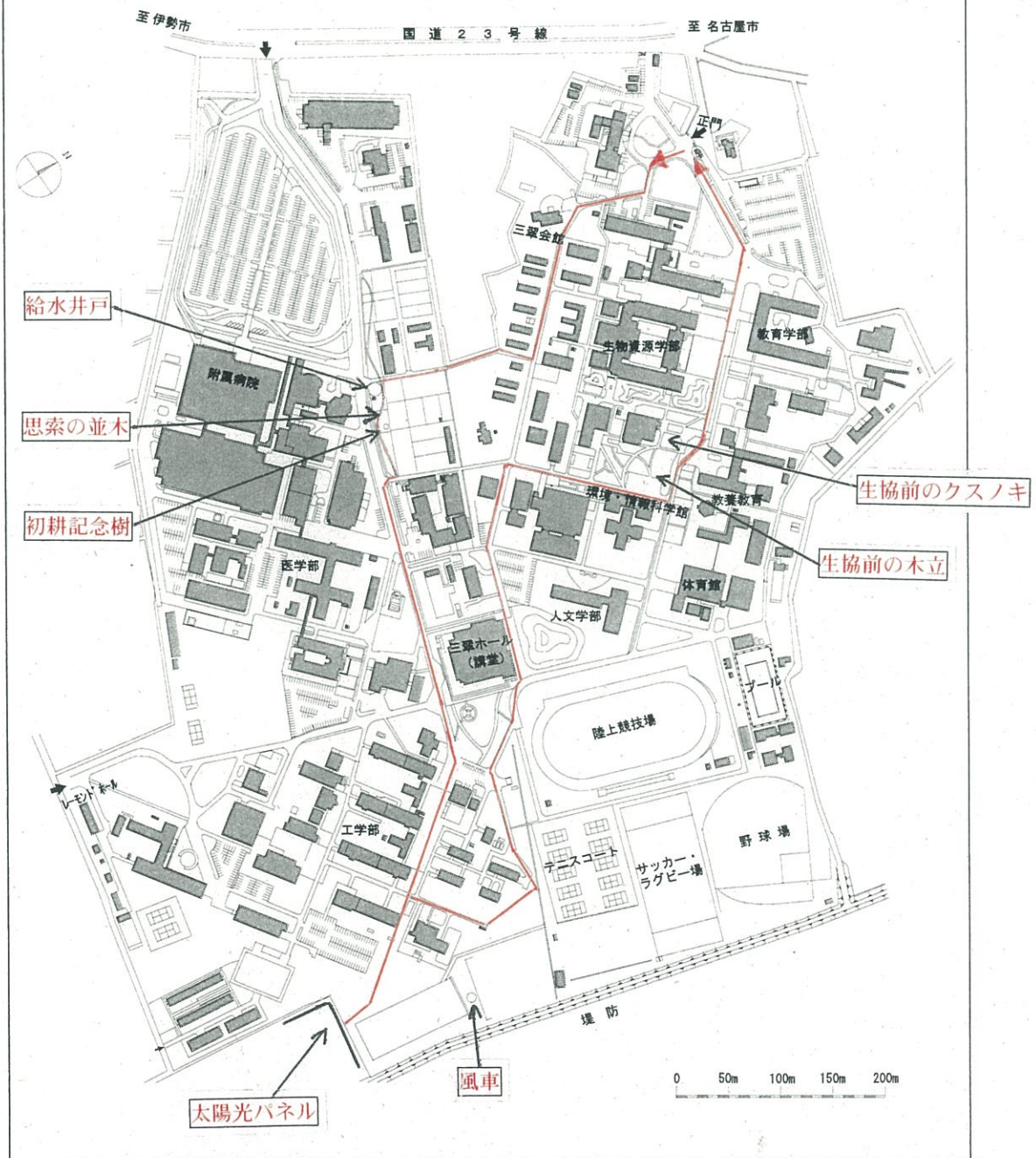
潮風を感じながら ～三重大キャンパス散歩～

3) コンセプト

「海沿い」の大学である三重大のキャンパスの自然を  
味わいながら、自然との関わりを考える。

4) コースアイデア

(下図にアイデアを朱書きする / あるいは別紙に記載する)





## 潮風を感じながら ～三重大キャンパス散歩～

三重大の特徴は「海沿いの大学」ということです。明け方、潮の香りが強く漂うことがあります。夜、誰も居ないキャンパス内をカニが歩いたりしています。学生が授業の空きコマに、仲間と潮干狩りに行ったりできるのも、海沿いだからこその贅沢です。



はじめに「三翠会館」をみてみましょう。正門から木立を抜けると、古い建物と庭園があります。三翠とは、空、樹、波の3つの「みどり」を指すそうです。海沿いの風景のイメージがたちのぼるようです。建物とともに、庭園の木々もよく手入れされています。





構内を歩いていきます。温室を通り過ぎ、大学病院の通りに出る手前に、「翠の小径」があります。ここは暑い時も木陰になる、歩きやすい道です。この角の、クズやイヌノキの茂みを透かしてみると、網がかかった円形の大きい形が見えます。前に建つ「土木遺産」の記念碑には、「給水井戸」と書かれています。



井戸の由来は、大正時代に遡るようです。三重大の前身の1つ、三重高等農林学校は、1922年にこの地に開かれましたが、まもなくこの地は農場に不適とわかりました。

これは、三重大学周辺の地質図です。大学はほぼ海岸の砂礫地の上にあることがわかります。農場を機能させるには、塩分の影響を抑え、灌漑を行う必要がありました。





この井戸は、その折に探索された水脈から掘られたものです。この水のおかげで、この海岸の地で農場を開くことができました。この井戸がなければ、現在の「海沿いの大学」は実現しなかったことでしょう。自然条件の難しさを、自然の水脈を使って改善する、という発想は、現代にも活かせる知恵かもしれません。

「翠の小径」を左手(東側)に歩くと、すぐ「初耕記念樹」の看板があり、後ろに見上げるような松があります。他の松と違って幹がまっすぐ立ち上がっていて、丁寧に植えられたことを示しているようです。植栽当時(1922年)の写真(以下左)には、高さ1mに満たない松の木(楕円内)の背景に多くの松が写っており、この海岸沿いの地は松が育つのに好適だったと考えられます。この約1世紀の間、人も景色も、どんなに変わったことでしょうか？



三重大五十周年記念誌より



さらに海岸の方へと歩きます。途中の三翠ホールの前では、学生がダンスや手品の練習をしていたりします。工学部を抜け、太陽光パネルの敷地を過ぎると、海は道路のすぐ向こうです。海岸沿いの道からは風車がとても大きく見えます。三重大学は「風車のある唯一の大学」だそうです。海から吹く風、海へと吹く風、さまざまな方向の風を受けながら回る風車は、まさに大学のランドマークにふさわしいといえます。



<http://www.eng.mie-u.ac.jp/futurestudents/learn/curriculum/mach.html>



風力発電は、太陽光パネルと同様、「環境にやさしい」発電として注目を浴びています。でも、本格的な風力発電のためには、風車を何台も設置するための膨大な敷地が必要になります。太陽光パネルでは、パネルをおいた場所の生態系が一度に絶滅してしまう問題も指摘されています。すべての電力問題は、限られた土地・資源を使って、電力の安全で効率的な安定供給のためにどのような発電方式を組み合わせることが望ましいか、の議論に行き着くと考えられます。風車・太陽光パネルの風景は、我々に将来への課題を投げかけているようです。

工学部の建物の間を抜けて三翠ホールの裏の細い道を通ると、プラタナスの木が数本ある「**思索の並木**」に出ます。「鈴懸の木」の名の由来である、冬に露わになったまだら模様の幹の枝先に鈴状の実をつけた姿や、大きな葉をまとった夏のうっそうとした姿が「思索」のための空間を作り出しています。

ここから図書館前までの道は、最も大学らしい雰囲気にも包まれた場所です。秋の日没時、コウモリが飛び交い、プラタナスの大きい葉が音もなく落ちる時、自分の知らないところで自然が常に動き続けていることを実感することがあります。



ここから図書館前を通って正門の方へ曲がります。生協前の大きな**クスノキ**が目を引きます。クスノキは常緑樹ですが、春には一部の葉が赤くなって落葉し、美しいコントラストを作ります。里山に多いため古い時代の帰化植物と考えられています。樟脳などが採れ、防虫・防腐効果から船の材としても使われたそうです。見上げると枝にはびっしりとノキシノブがついており、木の上からは鳥の声が聞こえます。クスノキはアオスジアゲハの食樹としても知られ、この1本の木にどれだけの生命が宿っているのだろうと考えさせられます。





正門に戻る前にもし時間があったら、生協で買ったアイスクリームなどを食べながら、前の木立の間を散策してみましょう。木には名札がついています。ヤマモモ、ウバメガシは、この地方によくみられる常緑樹で、トベラは海岸で見られる植物です。この地の環境・風土に合った木々のおかげで、キャンパスは冬でも青々としています。「三翠」の「樹のみどり」が潮風を受けながら、今もこの地に伸び続けているのです。

